郭沫若全集

第Ⅱ期

第十二卷

岩波書店

野上彌生子全集
第II期 第十二巻
第十八回配本
（全二十六巻）

一九八八年七月六日　発行

定価四二〇〇円

著　者　野上彌生子
発行者　緑川亨
発行所　株式会社　岩波書店
〒101 東京都千代田区一ツ橋二-五-五
電話 〇三(二二六五)四一一一
振替 東京六-二六二四〇

印刷・精興社　製本・牧製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

© 野上素一 1988　Printed in Japan
ISBN 4-00-091162-7

目次

昭和二十九年……一
昭和三十年……二〇四
昭和三十一年……三七二
後記……五四九

昭和二十九年（一九五四年）

一月一日 金 晴

昨日思ひきり用心したためか風邪にはならないですんだ。例年のごとくホールに火を焚き、Tの写真にもお供へをして松井とおぞうにを祝ひながらN・H・Kに録音した年賀ユービンをきく。私のは五番目。今度は何度も録音をし直してどうかと自信がなかつたが、恥かしいほどではない。これは私の話し方がうまいより他の人ゝがあまりに下手だからである。まつたく、日本人はどうしてかう話術に拙いのであらう。

夜ラヂオのニュースで宮城に新年の参賀に行つた一般市民が三十数万にのぼつたところ、その行通整理がまづく十八名のものが死し、三十何名が重軽傷を負うたさわぎを知つた。これは皇室を看板のお芝居の行き過ぎである。なんともセイ理がつかなくなり、二重橋の上にツナを張つたのが、後の群集に分らないでまへに押す力を一層強めたものらしい。バルコニーには天子さんが笑顔で帽子をふつてをり、皇后が派手なすそ模様でならんでゐる。かゝる群集の心理を解剖するといろ〳〵なデータが見だされるだらう。勿論伝統的な皇室尊敬の念をもつものが多く出掛けたには違ひないが、晴れてあたたかいお正月を、さてどこで過さうかとなると、この場所は一銭の入場料も要らず、ふ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

だんは通行禁止の二重橋といふものが渡られ、またつねは見られない珍しい二人の人間を眺められるといふ条件が多くの足を引きつけるのだと見られなくはない。極端ないひ方をすれば、この椿事は東京に家族づれの健全で、且つ無料な娯楽場が欠げてゐる証拠である。

一月二日　土　晴夜小雨雷鳴

年賀状を書いたり、今度の三月能の清経、天鼓、狂言鎌腹の解説を書いたりする。鎌腹はなかなかおもしろいものである。足ダンロの電気の通じ工合が暮れのうちからどうも思はしくなかつた。Yにすつかり分解して貰つてよくなつた。

一月三日　日　晴

夜の雨もわづかで、春のやうにのどかな日光である。毎朝義務的にたべたおぞう煮も、今日ですむのは有りがたい。Tが四日目のみそ汁を待ちかねて食べたのを思ひだす。私の食慾はます〳〵少くなる。

近所の会礼をすまして帰つたところへ松本謙三来る。小山氏宅の会合のこといろ〳〵聞く。弥一の宗家顔が一番ことを面倒にするのは事実だが、松本に宝生名を与へるとしても、彼を家元にする事には異議が出さうである。森を宝生にして家元とし、松本を監督の地位にするのも一案である。どちらにしろ血統か、芸かの選択が基礎になるだらう。さうすれば弥一はもつとも条件的に不備になるわけだ。安倍さんがここでは一つ公平に捌く必要がある。

一月四日　月　小雨

午後多田さん年賀に来る。法政かんけいの人で彼だけはむらのない誠実を示す。学校の話いろ〳〵。この間岩田さんの話からちよつと気になつたアンチ大内の空気が一時生じた事はたしかだが、すでに解消したとのこと。岩田さんの言葉は太田氏の考へ方を示すものだが、彼らももつと理性的になることに努めなければ、むしろ知性的に。——

暮れから岩波連のかげが見えないのが少し不安である。布川夫妻も毎年三日ごろには必ず訪ねて来たものであるが。これは箇人的な感情ではなく、店の事に繋がる漠然たる気づかひである。

一月五日　火　美しい晴

この間から読みかけのリルケ－ジードの書簡集を読了。これらの手紙が中々辞令にとみ、よそ行きのねんごろさに充ちてゐるのは、西欧の文人たちの一般的な手紙のスタイルであらうか。とそんな疑ひさへもつて読んで行つたが、リルケの差押え事件に関してのジードの真剣な努力のくだりで、これは純粋な友情の誠実さなしには出来るものではないと心打たれた。また後段のクロソウスカ夫人の息子のピエールの巴里行きに示したジードの友情はそれ以上にもこまやかで美しい。ジードにはどこかワン・マンらしい態度もなくはなかつたかと想像されるが、少くともこの文通を通して描かれるジードの影像は真率で、熱心で、自分の尊敬するものに対しては十分ハンブルに奉仕的であつたのを証明する。それに比するとリルケには幾分ひとの好意に甘へ過ぎるところが見られる。これはタクシス夫人などとの関係で——性質にもよるだらうが——無意識に現はれるもので、それが婦人たちには一種の魅力にもなつたかと感じられる。よく調べて見ると、ホンヤクの話以外は、頼

みごとは常にリルケのみからなされてゐる。また彼がヴァレリと逢つた事や、それへの傾倒をジードには多く語らないところ、彼のデリケートな配慮もあらうが、対人的にはジードなどより苦労をしてをり、用心深いのを示すものではないだらうか。またこれほど深い親愛と誠実を披瀝しあひながら、その私的生活にはみぢんも触れあはないところも西欧的な生活態度といふものだらうか。前のパリの家探しの依頼はベンヴェヌタのためであり、あとのピエールのためのものは、むしろ彼の母クロソウスカ夫人への愛からと見るべきであるが、そんな点は気ぶりにも見せない。一方ジードとしてはそれを推察しないわけはないのに、――リルケの死に際してクロソウスカ夫人にあてた悔み状がよい証拠である――決して示唆さへどの手紙にも見出されない。これは他人の内面的な問題にすぐ鼻を突つこみたがる日本人などとなんと大きな相違であらう。同時にまた彼らの女友だちなる「〔空白〕」の中におかれてゐる幅のひろい、自由な感情生活も、私たちの社会には見だしえないものである。ジード夫人が正しい意味では彼の妻でなかつたごとく、彼の周囲には準夫人ともいふべき女たちが多くゐた筈だ。コンゴー旅行に加はつたM―夫人だつておそらくその一人であつたらう。しかしリルケのかうした婦人関係においての特色は、それらのすべてが芸術の領域の人々だといふ点である。サロメとしても女流作家に違ひない。結婚したクララは彫刻家、ベンヴェヌタは音楽、クロソウスカヤ夫人は画家、タクシス侯爵夫人とてもアマチュア的芸術婦人であり、彼が二度逢ふのを怖れたノワイユ夫人は女詩人である。学問も教養もない唯一の女はマルトのみで、これが実質的にはどれほどの接触をもつたか不明にしても、日本の文学者、詩人諸氏が一般的にせんたくする

のはこの種の女であることを考へても、著しいコントラス〔ト〕といへよう。これを書いてゐるところへ田辺先生から御手紙がとどいた。哲学の勉強を私が「迷路」がすんでからにしようとした事について反対意見がのべられてゐる。全く先生は「迷路」の完成に哲学を必要としてすすめられた事に私とても気づかなかつたのではない。ただ今度の執筆にはあまり多くの準備が必要な為にその方を第一と考へたまでで、先生の仰しやる事は正しい。

二日の夜であつたかラヂオでジャズ歌謡をきいて、これが今の若い人ゝを烈しくひけつけてゐる理由がのみこめた。これは音楽の大衆小説だ。さうしてステージと聴衆とが一つの強い興奮にまきこまれるところは、もとの浅草の小屋の安来節をバタいためにに変へたに等しいといへよう。

一月六日　水　晴

武田泰淳の「天と地との結婚」をよみ終る。描写力は鮮やかで、戯画的な手法には一種の臭味があるが、飛行機の運動などは十分単念（ママ）な研究をも遂げたと見え奔放ながら精密で且つリアルである。ただ構成のロマン的な自由さは、組みたてが安易だけに脆く薄つぺらなものに作品を終らせてゐる。結句はこれは思想の欠如から来るもので、皮肉な諷刺な深刻にならないで、エノケン式のファースになつてゐるのもその為である。これは作家の質のもんだいでもある。

午後井本夫人。健作氏が法政を辞したことを多くの未練をもつて語られた。彼のうたひがなんとも困まつたものなのを当人も奥さんもさうとは思はず、かなり自得の感をもつてゐられるのをいつも不明だとはた目には考へられるが、対人世にもそんな態度があるらしく見える。身を退くべきかど

うかの汐時を、素早く弁へないのである。夜先生へ手紙を書く。

一月七日　木　晴

矢崎さんの「アヴェ・マリア」をよむ。大に得るところがあり、通俗講演といひながら立派に学術的なものであるのも矢崎氏である。こんなものをしづかに愉しんで読みつづけ度いが、また四月号にかゝらなければならない。石井さんが午前その話が見(ママ)えた。

午後は宇野夫妻。青山さんが明治女学校の事をききに来る約束で、かちあつたが彼女は不二子さんに一時間たのんだ。夕方まで。あの学校について私はまだちやんとしたものを書かない。お清さんや民ちやんたちへの顧慮からもあるが、そのうち書いてもよいだらう。

一月八日　金　晴

セガースの「七つの十字架」をよみはじめる。やつぱり学ぶところが多い。午前は斎藤氏。八十になられた彼の立派な母堂にヘルメス・デリカを一瓶呈上。

斎藤氏のまへに「世界」の石井さん来る。四月号で百号になるとのこと。気重いけれど書きはじめなければならない。プレゼントに買つてあつたハンケチをあげる。「世界」についても忌憚ない忠告をしておいたが……

憲法擁護の会から十二時[日]午後片山哲、有田八郎両氏が来訪し度きデンワ来る。なんらの期待ももたないで来るなら来てもよいと返事する。

一月九日　土　晴　夜小雨

四月号の執筆をはじめた。「向側の家」といふ題をおもひついたが、「赤紙」としてもよいかも知れない。慎吾の手記をとどけに行つたあと、召集令が来る事にしよう、と漠然と考へてゐる。どうにか道がひらけるだらう。

セガースを午後の一と休みのあとつづける。人さへ来なければ疲れがすくないから、この休息のあと読書も可能である。松井を今日から二葉会の洋裁にやる。

一月十日　日　晴

執筆、半ピラ三枚になる。雪ちゃん来る。伊都子のこと。かんけいをもち度くない旨を語る。入浴のあと加藤猛夫氏のところまで答礼、大極殿進呈、

中村哲氏より手紙。憲法擁護の会の件である。

一月十一日　月　曇風

午後中さん夫妻来り、おでん、おう飯、カイボシで晩さんを倶にする。宇治の御茶とカイボシ進呈、それを取りに来るとのデンワが昨夜あつたので、よいお天気つづきでもあり、晩食をするつもりで来てと誘つたのであるが、珍しく風吹きになつた。しかしさうひどく寒くもなく、雨にもならないで仕あはせであつた。中さんは生活的には慎ましさを余儀なくされるだらうが、幸福な点では安倍、小宮などよりは上であらう。ただ「愛読者――」をすぐ口にするのには困まる。寂しいからでもあらうが、自分の作品への自得のせゐでもあるに違ひない。彼の文学的な世界はそれでわるくはないにしても、新しい成長や進歩がないのはそのためである。私はなんと冷静に批判するだらう。感情

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

は感情として、この態度ははじめから変はりはなかつた。それにつけても、熱情といふものは脆弱で愚かだ。大切なのは、美しいのは、貴重なのは知性のみである。

一月十二日　火　晴

午後片山有田両氏が前ぶれに拘はらず終に来なかつた。これはいつそ有りがたい。三枝さんが午前に、午後三枝子ホンヤクをもつて来てよむのをところどころ直してやつた。ハンス・リヒテンの母のやうな婦人は日本にはなか〳〵見だされまい。またこの直線的な強さはいかにもドイツである。立ち場と思想がかはればまた、これがナチの強さにもなるのだからおそろしい。

先生から手紙。彼のブッキラボウな表現が私にショックを与へたのをわびてゐられる。ライプニッツの「自然と恩寵について」は彼〔が〕オーストリアの貴族に書いて送つたもので、素人を相手だからよく読めば私にも分かるであらう。さうしてそれはカント、ヘーゲルの千万語を要約したといへるほど価値の高いもので、ハイデッガーも激賞してゐるとあつた。すべてそれによつて私を啓発し指導しようとしてくれるのだから、私としてはこれ以上感謝すべきことはない。大事なことは決して口にはださず、ただ酔語と冗談しか交換しない東京の老人たちと、これはなんと著しく異なる接触であらうか。

一月十三日　水　晴

午前××の××氏。彼の恋愛のうちあけをきく。相手は人妻。暮れにキリがつけられた。夫がもつと理解してくれたらといふ。リルケの愛人たちの話をしてあげた。まつたく、サロメにしてもクロ

ソウスカにしても同じく人妻であるが、彼らの夫たちの態度は、少くとも表面から伺はれるところでは実にものわかりよく捌けたものだ。彼らとても嫉妬なしではない筈であるが、日本の男とのこの不思議な相違はクリスト教で培養された人道主義といふもののみでは割りきれない。これは生活

〔以下空白〕

また久しく日記を怠つた。今日は二十二日だが、そのあひだの事も思ひだされる事は書かう。

一月十七日　日　曇小雨

執筆はとぎれ〳〵で思ふやうに進行しない。

午後おそく布川夫妻、おくれた年賀にとて来訪。ささまの羊かん一折頂く。きみ子さんにクツ下、まりちやんにもハンケチをあげた。ギリシア神話の少年文庫とジヤスト・ディヴッドはいづれも三月には出版されるだらう。「迷路」の五部もつづいて出せるが、少し加筆を必要とする。四月号がすんだら早速それに着手する旨を返事する。小林と角川和解の事はかんたんには行かないらしい。

一月十八日　月　わづかな小雨、のち曇、夜は月

今日は虚子庵の豊文会なるものゝ謡会に列席故そのまへに北カマクラに下車墓詣の予定で出掛けた。ひどい道で花屋まで辿りつくあひだ自動車、トラック、バスの泥をのけるのに苦心さんたんする。新調の下駄タビどろだらけになつたのを例の稲荷ずし屋のおやぢが見て下駄を洗つてくれる。タビは穿き代へを用意してゐた。クルマを呼ばせたのはよいが、それがまた八幡さまの裏でエンコする

さわぎで、定刻の二時を半時間も過ぎて漸く辿りついた。会する者安倍能成、有島生馬、高橋健二、米川正夫、岩波の渡辺氏、その他は地頭の高橋進、松本たかし、宝生の事務をとり、この会の世話人の佐藤氏、それから那須辰三さんわん屋の息子、その他数人。竹生島がはじまつてゐたがシテは誰だか最後まで分らず仕舞ひ。そのあと安倍ワキ、野シテ、ツレ立子で鉢木、あうむ小町は虚子シテ、米川ワキ、草紙洗小町は有島シテ、高橋ワキ、那須貫通、立衆渡辺とほか一人。私は草紙洗でもうたはせられるかと思ひ、その方は今度の下掛の会でもシテなので十分けいこしておいたが、鉢木のそれもシテは不意打ちでちよつと困つた。幸ひさうわるい出来でもなかつたらしい。これは文学をやるもので、宝生派をうたふ者を主とした会とのこと。私がどの程度にうたふかは人ゝに好奇心があつたらしく、意外な思ひを彼らは賞讃にした。安倍さんのワキよりはたしかによかつたかも知れない。安倍さんは山でうたふ時の方がずつとよく出来るのはいつもの通りである。高橋健二氏がまだ生な調子ながらおかしくはない。有島さんはひどい。米川氏のは少しも音楽的でない声だ。近くの支那料理屋でみんなで御馳走になり、私は小林邸に一泊。美沙ちゃんが美しいお嬢さんになつたのにおどろく。

一月十九日　火　美しき晴

朝食の卓で勇氏に角川の事を話す。彼は私には無条件でおジギする態度を見せながら、他に向つては、小泉氏と私が心配してくれるので小林に逢はうか、といつた口吻を示す由、それでは二枚舌になるわけだ。小林がうなづかないのも無理はない。その他に私は家がモキ名義である事から、もし

も私が亡くなつて全集でも出るなら、印税は四分し、三人の息子に分けたあとの一分はストックにして、不時の用や、また誰でも余分な金が要る時に使へるようにしておいてくれと頼んだ。これは遺言の一種である。七十になれば、いつ死ぬか分らない。といつてもまだ実感はないが、これだけはいつておく方がよい。小林さんや布川さんはもつとも適当な相手である。彼が東京に行つたあとみどりさんが来てくれ、久しぶりに逢つてから昼まへに辞去。

いまは女中がゐないで、小百合さんのひとり働きである。少しやつれてゐる。口にはださない感情の内攻があるらしく、家庭内にも活き〳〵とたのしげなものがない。

帰りに檜さんへ御悔みに行くつもりで、鎌倉市大船山ノ内とあつたので、電車で大船にをりて交番にきくと北カマクラの方が近いとのこと。とにかく自動車を雇つて戻ると、なんといつもの花屋の手まへの材木屋の横をはいつて行つた山のすそなのにおどろいた。芝生を前にした明るい別荘風の家で檜夫妻が悦んでくれた。奥さんは白粉気のない知的な顔をして意外であつた。お父さん、兄さんたちサイ菌学者で檜さんとはフンイキの違つた家庭に育つたとのこと。途中の狭い路に待せてあつたクルマを檜さんがむかひに行つてくれたあひだに、そこまで送つてくれた小流の石橋のそばに立ちながらうち明け話であつた。このあたり岸には桜、小さい田畑、竹林、そのあひだの細い路にそうてところ〴〵に家が散在。カマクラの谷の閑居は扇ヶ谷などよりまたしづかに世ばなれてゐる。二時半の電車では檜さんと同車した。

一月二十日　水　晴

角川の××さん来る。昨日小林さんに話したこと、角川さんが相手で話の態度を変へてはことが成就しない旨を伝へる。××も角川がもつとハンブルになつて欲しいといふ。このごろ思ひあがつてゐるのであらう。私の今日の仕事の年譜を持参。瀬沼さんが拵つてゐたものとのこと。まるで私自らには記臆もないものでびつくりした。

一月二十一日　木　小雨

松井が今日やぶ入りに行く。夜はうなぎでM・Yの家族あつまつて食事。安達さんとび入り。昭ちやんの世田谷区の寄留すんだ由、宮本百合子の三周忌。燿三に花をとどけさせる。

一月二十二日　金　曇小雨

住友の内田さんが来て、今月の印税の預け入などすます。向ふから出かけて来るのは銀行としては商売なれど。こちらでも調法する。

一月二十三日　土　晴夜雨

朝大分市長の上田保氏ほか二名来訪。豊後節の復活についてその歌詞の依頼。それは断つたが彼がキリシタン博物館をケイカクしてゐて、金山氏を通じてローマ法皇にレンラクをし、すでに一千ポンドの寄附をえてをり、名産の竹で十字架をつくり、朝倉の娘にそれにキリストの像をつけて世界のカトリック教徒相手に資本の四五億円をあつめるのを実行に移さうとしてゐる話にはおどろく。「迷路」の主人公の夢が現実になりつつあるわけである。上田氏はそんなケイカク性にとんだ活動家らしい。カトリックの仕事はかうして神とは遠く離れてつねに栄えるから不思議だ、

夕方おそく放送協会の摩尼氏来訪。はじめてなれど話多く夜に入る。彼はいつかのストライキでクビになつた後の復活組、N・H・Kの良心グループの中核らしい。朝の人生読本への放送の依頼。仕事でもすんで、ゆつくり考へた上での事にしよう。

一月二十四日　日　大雪

昭和二十六年来の積雪とのこと、一尺余、

それで一つおどろいた事がある。書斎の屋根の積雪のカタマリが窓からでた煙突に落ちた重さで、ストーヴの表面のハメコミのところから外づれてゐたのを、午食のあとベットに入つてゐたあとに発見。もしボウ〳〵マキが燃えてゐたら危かつたかも知れない。それよりなにより雪の重みで、室内のストーヴにそんな異変を生じたのにびつくりした。モキが窓ガマチにのつて雪を十能と火かき棒で払ひおとして、もとの通りにしてくれた。あとYもホンヤクの原稿をもつて来た時、またそのあとに垂れて来た雪をおとしてくれる。丁度入浴に来てゐたモキが窓ガマチにのつたYの腰を押へる。それがみな好ましい性格と、それ〴〵に立派な研究的な仕事をもつてゐるこんな息子たちを、家の周りにもつて暮らすたのしさをこの瞬間つよくおもつた。

一月二十五日　月　雪

この間とぎれ〳〵の執筆、今日は二枚とすこし進行。むりをせず、密度をおとさず書いて行かう。

一月二十六日　火　美しい晴

白雲に日光がてり輝いて、天地が明るく、きらきら眩しい。新東宝が作つた第二欧州戦争の記録映

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c